

■特選

◆小学校中学年の部

◇ほんの少しの勇氣 交野市立交野小4年・加藤雛さん

夏休み、ペルセウス流星群が見られる日に、おばあちゃんの家で夜空を見上げました。

「流れ星を見たら、願い事を言ってごらん。」

とお母さんに言われました。

わたしの願い事かあ…。そう思っているうちに、パーッと一つの流れ星が目の前を通り過ぎていきました。

この本は、引っ越しと転校で、友達やお父さんとはなればなれになり、さみしい思いを心の中に閉じこめて生活するサトシと、サトシの願いをかなえるために宇宙からやってきた青いカップの二人が小さなぼうけんをする話です。その中でも特に私の心に残ったのは、青いカップが言った「大抵の願い事は本人の力でどうにかなるのさ。」という言葉でした。

サトシは、何でも「今までと同じ」が良くて、新しいことにチャレンジすることができません。そんなサトシを変えようとカップはサトシのせ中を何度もおして、サトシも仕方なく新しいことにチャレンジしていきます。そして、サトシは「新しいこと」にたくさんの発見と達成感があることに気付きます。

私も新しいことは苦手です。食べてみておいしくなかったら…。失敗したときだれかに見られたら…。などと思ってしまうからです。でも、サトシが心を変えていくのを見て、ほんの少しの勇気で、今よりもっと楽しくて面白い毎日が私のところにもやってくるのかもしれないと思いました。

私も四年生で、サトシと同じように転校と引っ越しをしました。だから、サトシの気持ちが心の中にどんどん入ってくるぐらいよく分かりました。コロナのせいで学校も始まらず、新しい友達を作ることもできませんでした。学校が始まって、自分からだれかに話しかけることができなくて、どうして転校しなければいけなかったの、思うこともありました。でも、ある日お母さんに、

「待っているだけではだめだよ。ほんの少しで良いから自分から勇気を出してごらん。」

と言われました。

うまくできるか分からないけど、私からだれかに話しかけてみよう。そう心が決まると、気付いたら、友達が一人、二人と増えていきました。勇気を出すのはかんたんなことではなけれど、でも、自分の力でがんばったことは、とても気持ちがよくてすっきりした気分になりました。

サトシは最後のシーンでカップに

「あれこれ考えないで、やってみろ」

とせ中をおされます。私も頭の中で考えてしまう前に、どんなことにも自分から飛びこんでチャレンジしてみたいと思いました。

私の願い事は「私の周りにいる人たちが、いつも笑顔で幸せでいてくれること」です。サトシのようにさみしい思いをしている人がいたら、その人のせ中を青いカッパのように、やさしくおしてあげられる人になりたいです。

(「青いあいつがやってきた!？」松井ラフ／文研出版)